

チート能力を持って魔法とかあるっぽい現代日本に転生したけどよくわからんので、今日も俺はデュエマをする。

彼岸沙華

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、どこかの世界で1人のデュエマ馬鹿がバイクに轢かれ死んでしまい、何の因果かFate/stay night時空の冬木市へと転生してしまう。

……デュエマのカードの効果や能力、果ては実体化を自由に操れるチート能力を持つて。

そして、始まるチートオリ主による救済物語。

とは、いかなかった。

なんとこのデュエマ馬鹿、Fate/シリーズのことは1ミクロも知らなかったのだ。

そして、始まったのはデュエマ馬鹿によるドタバタコメディー。

その強大な力を無駄遣いしながら、時に泣いたり笑ったりぶちギレたりして生きていく。

彼らの運命を変えながら。

※注意事項

【1】 作者はF a t eにわかです。ここの設定間違ってるよつて時は教えてください。

【2】 作者はデュエル・マスターズガチ勢ではありません。

大会とか行かずにファンデツキ組んで友達と遊ぶくらいしかしないライト勢です。

なので、カードの知識とかに関して誤りがあったりしたら気軽に訂正してください。

よろしくお願いします。

目次

紀元前

第1話 祝え！この物語の開幕を！

1

第2話

7

第3話

11

紀元前

第1話 祝え!この物語の開幕を!

皆はデュエル・マスターズというカードゲームを知っているだろうか?

知らない人は簡潔に言うとうち最高に頭のおかしい激しく熱かりしカードゲームだ。

競技中に結婚を申し込めたり、叫ぶはめになったり、その場でパックを剥いて使えたり、カレーやアイドルの香りが付いたカードや金属製、下敷きレベルでデカイカードがあつたりするぞ。

で、何でこの話をしたかというと特に意味はない。

まあ、自分の大好きなものは時々発作的に紹介したくなることは稀によくあることじゃない?

あ、全くない。そうかー。

……と、ここまで誰かに語りかけてる風独り言で逃避してたけど、そろそろ現実を受け入れないといけない気がしてきた。

この自分が赤ちゃんになつてて見知らぬ若い女性に抱きかかえられているこの状況を。

いや、無理だわ！

受け入れるとか出来るかそんなもん。

一応、今の状況は理解できるぞ。

自分が転生プログラムしたってことでしょ？

だって、死んだであろう時のことはちゃんと覚えてるからな。

デュエマの新しいパックの発売日だ! 買いに行こう!! と意気揚々と家のドアを開けたら、何故か赤いバイクが突っ込んできてそのままブラックアウト。

気が付いたらこの状況。

こんなの受け入れられるわけがない。

前世への未練はたらたらじやあああああ!

こんちくしょうめええええええええええ!

もう赤黒バイクは二度と握らんど(風評被害)

……それにしても、もうあいつらとは二度とデュエマできないんだよな。

もう二度と俺が10年以上かけて集めたカード達は使えないんだよな。

それに、両親より先に死ぬなんてとんだ親不孝者だよ。

……そう思うと少し、いや今自分が赤ん坊だから涙もろくなってるのか大泣きしちゃう。

いや、する。

「どうしたのそんなに泣いて。よしよし大丈夫だよー」

俺が悲しみに身を任せて大泣きしていると、俺を抱いている女性。

もとい、今世の母親が宥めてくる。

だが、今世の母親には悪いが会って半日も経たない人に宥められて落ち着くほど今の精神状態はよろしくはない。

そのままギャン泣きし続けて、何をやっても泣き止まない俺に対して今世の母親はしばらくあたふたしていたが、ふと

何かを思いついたような表情を浮かべる。

「もしかして、お腹空いてるのかな？」

今世の母親がそう言った瞬間、何故か嫌な予感がした。

違うわい！悲しくて泣いてんじや。腹なんか減ってねえ。

そんな予感に負けずツツコミを入れるももちろん嫌な予感は無くなるわけもなく。

何かをしている今母（こんはは）（めんどくさいので略）を見届けるしかなかった。

「はーい。ママのおっぱいですよー」

そして、その嫌な予感は見事的中した。

自分の胸を吸わせる為に露出させ近づけてくる今母に対して俺は泣くのも忘れ、

内心は絶叫してた。

え？普通に男子だったら女性のおっぱいが見れて嬉しいだろう、って？

馬鹿言うんじゃないよ自分の母親の胸見て喜ぶなんてそんな歪んだ性癖は持ってな

いよ。

とうか、今母。

俺がお腹空いてないことは見ればわかるでしょ、無理に押し付けてくるんじゃない。ほらほらじゃないよ。いい加減諦めない。

もうとつくに泣き止んでるでしょ

……ふう、ようやくやめ、

ちよつと、そつちは本当に違うからやめなさい。

やまなさい。まじでやめ

「みやあああああああああああああああああああああああああああああああああ」

やだもうお嫁にいけない。

第2話

俺がこの世界に緊急再誕生してからから1年が経った。

最初の頃こそ前世への未練やその他もろもろで何とも複雑な気持ちだったが、流石に1年も経てばある程度の気持ちの整理は出来た。

まあ、その気持ちの整理が出来るまでが凄く酷かったんだけどさ。

前世の夢を見て夜中に飛び起き、ここが前世ではないと理解するやいなや大泣きしたり、似たような感じで突然悲しくなって泣いたりした。

今母が何をやっても泣き止めなくて、すっごい困らしちゃって申し訳なかったな。

……つて、今思ったけど普通の赤ちゃんとも何も変わらなくない？

なんか、いい方向に転がりそうなのでヨシ！

ということにしておこう。

じゃないと、精神的に死にそうだ。色々な意味で。

それから、さつきまでの話は置いておくとして。

この世界についてわかったことが2つある。

1つは、この世界は（前世基準の）現代日本で地名は冬木市というらしいこと。

そして2つ目は、俺は最低でも向こう16年はデュエマが出来ないということだ。

なんでそんな具体的な年数言えるの？お前はエンド・ジャオウガなんかか？と言われるかもしれないが答えは簡単だ。

ここは、現代日本は現代日本でも（前世基準で）未来ではなく、過去。

俺が転生したのは、時は西暦にすると1986年、場は天の川銀河太陽系第3惑星地球日本国県わかない冬木市だったのだ。

これを知った時はなんで、過去なんだよそこはちよつと後の未来だろうがと思ったがこれ以下に過去過ぎるよりもまだマシだろうと考えることによつて心の安寧を得た。

と、ここまで色々振り返つてみることで逃避してたんだが、そろそろこの現実を受け入れなくちゃいけないだろう。

そう、このクツソ暇と言う現実を。

別にそう仰々しくいうことじゃないだろうって？

いや、ほんとまじで暇なの。

もちろん、両親に遊んでもらったり自分でも何か暇つぶししようとはしてるけど。

前者については、楽しむ楽しまない以前に何かに目覚める訳でもなく。ただただ、精神力とかその他もろもろががりがり削られていくだけだし。

後者に関しては現状やれそうなことは試していつてるもののいまいちこれといったものが見つかってない。

そして何よりも問題なのがデュエマがしたい欲求が溢れすぎてなんかおかしくなりそうってことだ。

なんかもう一周回ってあと数か月後は何とかかなりそうな気がするがそれはそれ。

とにかく今はデュエマがしたい。

あーもう。

だれかどんなジャンクデッキでもいいから持ってきてどんな奴でもいいからデュエマがしたい。

例えば、

いけ、ボルシャック・ドラゴン！

みたいなこと言いながら切り札召喚し、た、い……？

……え？

対のプラスターにエネルギーをチャージしている。

つて、ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！

あれを撃たれたら、俺が死ぬどころかここら一帯が吹き飛びかねない。

そんなことを考えている間にプラスターはどんどんエネルギーを溜めていく。

「デーモン・ハンドー！」

考えようとしても時間がない。そもそも、こんな意味不明な状況でまともに思考できる奴がいるのだろうか。少なくとも俺には無理だった。

そして、そんな俺がとつた行動は、ボルシヤック・ドラゴンが出てきたんだから、こつちも呪文くらい使えるだろー！という投げやりな考えでデュエマの定番除去呪文の名前を叫ぶことだった。

普通だったらそのままボルシヤックプラスターで周囲一帯と共に消し炭になるが。

そもそもこの状況が普通ではない。

俺の言葉を合図としてボルシヤック・ドラゴンの真下の空間が揺らめき始め、さらにそこから無数の手が現れボルシヤック・ドラゴンの抵抗空しく引きずり込んでいった。

そして、そんな光景を引き起こしておいて事態に全くついていけなかった俺は、

「……………やったー！ゆうしようだー！」

特に意味もなくそんなことを叫んだのだった。

その後、同じ部屋にいた今母はボルシヤック・ドラゴンが出てきた辺りで気絶し、さらにボルシヤック・ドラゴンを倒した直後に、何故か偶然たまたま地震が発生。今母は赤いドラゴンがどうのこうのと呟いていたがうやむやになり。

あの事件は完全に俺の胸の内にはまわれることとなった。

そして、それからしばらく経って俺はなんかデュエマのカードを実体化させたりできる能力があることが分かったのだった。

よし、これであと16年分の暇つぶしができたぞ！